第1回能代・山本地域医療構想調整会議 議事要旨

- 1 日 時 令和4年8月23日（火） 午後6時から午後8時まで
- 2 場 所 オンライン会議
- 3 出席委員 18名中17出席

氏 名	役 職 等
楊 国 隆	能代市山本郡医師会長
工 藤 茂 将	工藤泌尿器科医院長（有床診療所代表）
大 塚 博 徳	地域医療機能推進機構 秋田病院長
太田原 康 成	能代厚生医療センター院長
加 藤 裕治郎	能代山本医師会病院長
野 口 幹 雄	能代病院長
大 淵 宏 道	森岳温泉病院長
庄 司 尚 人	能代市・山本郡歯科医師会長
小笠原 達 志	秋田県薬剤師会能代山本支部副支部長
安 田 純 子	秋田県看護協会能代・山本地区理事
河 上 泰 幸	全国健康保険協会秋田支部業務部長
岩 村 庄 英	特別養護老人ホーム「もりたけ」施設長
斉 藤 誠 宏	八峰町地域包括支援センター所長
与 齊 勝 也	能代市市民福祉部健康づくり課長
佐々木 英 樹	藤里町町民課長
小 松 仁	三種町健康推進課長
石 上 義 久	八峰町福祉保健課長

4 議事等

（1）地域医療構想の推進について

①二次医療圏の状況について

【事務局】

（資料により説明）

【JCHO秋田病院長】

昨年も確か話題になったと思うが、秋田周辺の方に乳がんの患者が移っている点について言えば、今、おそらく能代・山本地区では、外科として乳がんは扱っているが、秋田周辺に行くと乳腺外科として独立して患者を診ているのが現状だと思う。となれば、

本来であれば、大学も絡んでくる話だが、もし乳腺外科という名前で、能代厚生医療センターに乳腺外科ができれば、この数が半減し、もっと地域で治療できる状態になると思うので、この資料は非常に参考となるが、これを地域医療構想という目を見た時に、県はどのように、この表を分析しているのか。

【事務局】

今の時点では詳細な分析は行っていないが、今後、分析して医療圏ごとにどの分野が得意でどの分野が苦手なのかを把握していきたい。

【JCHO秋田病院長】

3、4年前に地域医療構想が話題になった時、疾患がこれぐらい少ないのだからとか、これしかこの地域では治療してないのだからということで、ベッド数をコントロールするための資料にしていたと思うが、それは、やはり能代・山本から秋田に患者が流れているだけで、逆に言えば医者がいなくて、この地域にベッド数がいらぬのだという資料には使えないのではないかと。がんの治療をこれしかしていないということも理由に、この地域にはベッドはあまりいらぬのではないかと。使う資料としては説得力が無いものではないかということも言いたい。医者さえいれば、乳腺外科というのができれば、秋田周辺に出ていると言っていたが、この地域で乳がんの治療ができるようになる。そのように標榜してやっている病院が無いだけで、本当は県として考えるのは能代・山本で治療できるような医師の配分をどうするかという議論ができる資料ではないかと思っている。

【医務薬事課長】

単純に実態ということではなく、本来必要な医療は何か、それをどこで提供できるのか。提供できるようにするのが地域医療構想の考え方だと思う。資料の使い方、分析の仕方については考えていきたい。

【能代市山本郡医師会長】

乳がんは、やはり疾患の特異性もある婦人科領域のがんである。子宮がん、子宮頸がんもあるが、乳がんは、協会けんぽの資料だと、比較的若い女性が多いので、デリケートな部分である。実際、当院の職員に聞くと、乳がんは能代・山本以外の秋田で診てもらいたい。子宮がんは能代・山本でもいいが、知っている人がたくさんいるから乳がんは能代・山本では診てもらいたくないというセンシティブな部分がある人。また、能代・山本でもいいという3種類に分かれた。能代・山本の医療機関でも、例えば能代山本医師会病院でも十分に乳がんの治療はできるはずなので、これに関しては疾患の特異性として別に考えた方がいい。

【地域医療構想アドバイザー（県医師会島田常任理事）】

患者数の減少に関しては、令和2年、令和3年とコロナの影響があるので、そこは考慮して見なければならぬ。また受療動向の件だが、例えば地域医療構想では能代・山

本地区では心疾患、特にP C Iが少ないという当初の分析があったが、ここ数年、能代厚生医療センターで、心筋梗塞や狭心症の治療がだいぶ進んできて地域内でできてきている。30分以内に治療しなければいけないような心筋梗塞が地域内でできるようになったということは評価される内容である。加えて、この表に関して言えば、それぞれの医療機関で、これを利用して自院の将来の進め方の参考にすべきとも感じた。

【能代厚生医療センター院長】

将来的には、大事な話題かもしれないが、患者数が何万人減ったからといって決して仕事が楽になるわけではない。三位一体改革の中、医療従事者の地域偏在ということで、今この地域ではそれぞれの医療機関が苦しんでいるので、各現場でどうかということであれば、それぞれで意見があるかと思うが、本来我々が話し合わなければならないのは、今、現場で何が起きているのかであるので、資料で説明のあった患者数減少については全て受け止めなければならないと思っている。

【能代山本医師会病院長】

印象としては、本当に患者が減って困った感じはなく、逆に増えている患者もいるので、その場、その場で対応を考え、その時一番良いことを考えていくことであると思っており、将来的に少なくなるかどうかまでは考えていない。

【J C H O秋田病院長】

乳がんのことを話したが、実際に患者が減っているのは、おそらく人口自体が減っているということがあるからだと思うが、それとイコールでこの地域の患者が減っているかといえば考え方はちょっと乱暴だと思う。なぜ先ほどから秋田に行っているからという話をするかといえば、最近、コロナで逆に秋田市からの搬送依頼や入院依頼が大変多い。秋田にはベッドがたくさんあり、医師もたくさんいるはずなのに、このコロナのような、いわゆる未曾有の事態になった時に、例えば秋田で、今、看護師や医者が雇ってしまった、あるいは病院の考え方で病院が使えないとなった時に、逆に秋田市からこちらに搬送依頼や入院依頼が相当数来ていることを考えると、この地域でできないことがあって、秋田市内に移動していた部分がある中、この地域でできることを増やすとなると、やはり医師を増やすことである。医師を増やしていくことも仕事だと思うが、人口減少だけではなくて別の要因で患者が増えることもあり得る。秋田市に行かなくてもいい医療をこの地域で作っていければ、もしかすると、患者の減少は抑えられる可能性は十分あるのではないかと、このコロナ禍を経験して感じた。秋田市でできていたことが、秋田市でできなければ逆にこっちに来ている。それがやはり将来的に考えて、秋田大学で医師が十分育ってきて、この地域に医師を派遣できる状態が整ってくれば、患者の減少はどうだろう。人口減少だけで片付けられるものではないかと思う。逆に将来を見れば、医師が増えて、能代・山本地域でも、もっと医師を増やせる（受け入れられる）と言った時に、その受け皿を最初から少なくしておくのは、逆に危険な部分もあるのではないかと思う。今まで、秋田で診なければならない疾患であった心筋梗塞とか心疾患が今は能代厚生医療センターでも診られるようになり、増えていった時に患者減少はどう

なるか、逆に増えたりはしないかと思う。

【医務薬事課長】

二次医療圏、三次医療圏の役割の中で、二次医療圏ができることをもっと増やしておくことが将来にとって大事なのではないかというご発言だった。やはり秋田周辺は、三次医療が多いが、その関係で秋田市に患者が行っているが、必要以上に流れているという印象を持っている。

【工藤泌尿器科医院長】

一般外来と透析を行っている。透析患者の人数についてはそれほど変化が無いが、一般外来はコロナが始まる前から、じわじわと少なくなってきたと感じていたが、コロナになってからは明らかに減っている。やはり受診控えなどがあると、開業医レベルでは感じている。

【能代市山本郡医師会長】

説明のあった資料は協会けんぽのデータのため、比較的若い人のデータである。がんなどは、やはり高齢者に多い。能代・山本地区は高齢者が多いので、このデータが、がん治療を本当に反映しているのかが非常に疑問である。これから団塊の世代も後期高齢者になり、おのずとがん疾患も増えてくる。そのような時に病床も数ありきで減らすとか、そういうことは危険ではないか。この話し合いは非常に大事な話し合いだが、協会けんぽのデータだけではなく、国保や後期高齢者のデータも本来であれば出して議論すべきではないか。

【医務薬事課長】

資料の充実などについては考えていきたい。

(1) 地域医療構想の推進について

②地域医療構想調整会議の開催状況と進め方について

③地域医療構想に係る対応方針について

【事務局】

(資料により説明)

【医務薬事課長】

ここ2年間、新型コロナウイルス感染症の関係などもあり、思うように調整会議を開催できなかったが、2025年が近づいていることや次の医療計画の策定もあることから開催している。今年度は複数回の開催を予定している。地域医療構想に係る対応方針については、すべての病院と有床診療所に記載をお願いするが、作成に当たってお互いに共有すべき点や御意見等、発言をいただきたい。

【能代病院長】

当院は、基幹3病院に比べ、いわゆる療養病院であるため患者を細かく分けられない。療養といっても施設にも入れない、急性期病院にも入れない、家族も家で看られない。要するに、動けない、食べられない、しゃべれないという方がほとんどで、誤嚥性肺炎や尿路感染症で重篤化することが多々あるが、当院では急性期病院に転院をお願いすることは、ほとんどない。できることを自院で行っている。自院の中で最終的にお亡くなりになる方も、回復される方もいる。基幹3病院では調査票を記入できると思うが、当院は記入が難しいと感じた。

【医務薬事課長】

提出いただいた調査票を次回以降の調整会議での協議の材料としたい。患者減少傾向や医療ニーズの変化、また医師の働き方改革への対応などを踏まえて、各医療機関の対応方針について、記載いただきたいが、地域の中で協議調整する必要があると考える事柄について、自院のことだけではなくて地域の全体のこととして御指摘いただきたい。

【地域医療構想アドバイザー（県医師会島田常任理事）】

第8次医療計画には感染症が重要な項目として入ってくる。第8次医療計画の策定に向けてこの感染症に関しては、前倒しで対応を進めると国からも通知が出ていたので、これまで以上に地域医療構想でも考えていかなければならない。先ほど大塚先生から話があったように、感染症に関しては、ある程度余裕をもって、複数の医療機関が対応できる体制を作り、かつ、常に満床ではなく、いざという時に稼働できることが必要である。ある程度の余裕を持たせながら病床を考えていかなければならない。コロナ前からもそうだが、今回、コロナを経験し強く感じた。

【能代山本郡医師会長】

無床診療所の立場として、無床診療所から有床診療所、あるいは病院に患者を紹介するに当たり、連携に問題があると感じている。対応方針を無床診療所の先生方にも書いてもらった方がいいと思うがいかがか。

【医務薬事課長】

無床診療所も含めると、かなりの数になるので、検討させていただきたい。

(2) 令和3年度病床機能報告について

【事務局】

(資料により説明)

【医務薬事課長】

能代厚生医療センターでは令和2年に、急性期病床63床を削減されているが、改めて病床を削減してどうであったか紹介いただきたい。

【能代厚生医療センター院長】

数を減らしてこの1年間、地域の医療に悪影響を及ぼさずにやってこれたと感じている。ただ、一方で、稼働が良くなりすぎて、明日、入院する患者をどこに入れるかという問題があった。その時は、リハビリ病院や他の病院にお願いするが、病床機能報告に表れているように、圧倒的に回復期と慢性期が足りない。例えば、急性期の数字と、回復期と慢性期を足した数字を、各地域で比較すると、大館・鹿角地区が非常に恵まれた地区だと思う。急性期が590くらいで、回復期と慢性期をたして530くらいだが、能代・山本地区は圧倒的に回復期と慢性期を足した数が少ない。県内でも少ない方だと言える。地域で危なくなった患者の引き受けをお願いする際、どうしても地域内ではできなくて、地域を超えて他の医療圏の病院にも声かけて患者を引き受けていただいたこともある。もちろん季節によって病床の稼働には変動があるので、厳しい時と比較的余裕がある時とがあるが、当院が病床を削減したことで、この地域の回復期と慢性期の病院が圧倒的に少ないことを、身をもって経験したところである。

【医務薬事課長】

能代・山本地域では、回復期病床が非常に不足し、急性期が多い状況であるとのことだが、JCHOでは急性期から回復期に病床を今後転換する予定がある。また、森岳温泉病院では慢性期から回復期の方に病床を転換する予定がある。この点は、昨年度の調整会議でも話題となったが、改めてこの点についてお話を伺いたい。

【JCHO秋田病院長】

今もその予定どおりである。能代厚生医療センターで患者を回せなくなった時、現在、協力ができていない。その大きな原因はやはり中小医療機関がコロナの重点医療機関ということで、そこのベッドが使えない。今この地域で、当院でも受け入れができてない大きな原因である。コロナの重点医療機関が今のところ9月いっぱいとのことだが、これが解消された時、積極的に能代厚生医療センターで退院しなければいけない人やまだ不十分だがベッドを空けなければならない時に協力しようと太田原院長に伝えている。しかし、いわゆる回復期として病床を利用するにあたっては前回もお願いしたが、許可を得るのに半年かかるため、そのためのシミュレーションをしなければならない。それをコロナの影響があったということで、3か月に短縮してもらうなどの配慮をしていただければ回復期病床としてもっと早く当院を活用できるようになる。

【能代山本医師会病院長】

病床機能報告の資料では、当院に回復期が無いが、地域包括ケア病床が16床ある。それを回復期病床だとすれば、急性期は16減り、146床となる。

【森岳温泉病院長】

太田原院長から深刻な現状のお話があった。当院としても全面的に協力するよう工夫はしているが、なかなか思うようになっていないので、今は病院の建設を待って、いろいろな機能を高めていかなければならない。そういった努力をしている段階である。以

前と比べ、今はこのように地域の先生たちが色々と意見を出し合い、協力し合っている形をさらに進めていき、さらに県も財政的な裏付けを持ちながらやっていくのは非常にありがたいことなので、今後とも進めていただきたい。

【地域医療構想アドバイザー（県医師会島田常任理事）】

森岳温泉病院に関しては院長が話したとおりの計画で進めている段階である。能代・山本地区の許可病床数は、病床機能報告によると平成28年では合計1,204床だったが、令和3年には1,039床、そして、さらに4年後の2025年には1,001床になる。つまり、この地域の各医療機関は、需要などを見ながら、例えば慢性期から回復期、あるいは病床全体を減らす努力を、自立的に進めていることが分かる。今話題になった回復期が、少しずつではあるが増加しているのは、地域医療構想の病床数の必要量にこだわるわけではないが、やはりニーズがあって回復期にシフトしてきているのだろうと考えている。

【医務薬事課長】

御指摘のとおり、病床の削減に取り組む病院、回復期の移行に取り組む病院それぞれの御判断で取り組みが自立的に進んでいると感じている。病床機能報告は病棟単位であるため、地域医療構想の必要病床数とは完全に一致するものではないが、課題として圧倒的に現時点では回復期が少ないとの話もあった。回復期が少ないことについて、在宅医療との連携の部分について御意見を伺いたい。

【能代山本医師会病院長】

当院では回復期病床として地域包括ケア病床が16床あるが、実際の稼働率は6割なので、まだ余裕があるが、問題点として、地域包括ケア病床では70%を在宅に帰さなければならぬという条件がある。それがあると老健施設などに入れられない状況もあってなかなか使いにくい病床でもある。制度がもう少し変わってもらえれば、もっと回復期病床を有効に使っていただけるのではないかと考えている。とにかく家に帰すか、あるいはサ高住みたいなところに帰すか、家と考えられるところに帰さなければならぬ。当院には老健が接続しているが、老健を十分に生かし切れていないところが、地域包括ケア病床にはある。当院では在宅を始めて3年目だが、なかなか在宅の数としては増えてない。その理由は開業医の先生方も在宅をやっている。お互いの住み分けとして当院での在宅は、麻薬を使うような胆がん患者などを中心にやっている。数は少ないが、それなりの機能は果たせていると思っている。もう少し増やしていければ、この地域の自宅などで過ごしたい人たちのために何とか力になれるのではないのかなと考えている。

【工藤泌尿器科医院長】

当院の稼働率は5割を切っているので、病床数を、現実合った数字に減らすことはできるが、病床数を減らすともう増やせないと聞いたことがあるので、減らさずに様子を見ているところである。

【特別養護老人ホーム「もりたけ」施設長】

日頃、地域の先生方に大変お世話になっているが、特にコロナの関係で、施設で職員が濃厚接触者になったり、家族が発症したりといった時に相談できる医療機関であってほしい。在宅医療は、実際に治療の場とは違い、暮らしの場というところもあるので、施設の中でできる医療は当然限界がある。それこそ緊急な状態の時に、頼れる病床の余裕があれば、地域の施設としてはありがたいと思っている。

(3) その他

【JCHO秋田病院長】

今年4月からJCHO本部の理事長が交替した。JCHOは独立行政法人の1病院として秋田にあるので、地域医療構想に関しての本部の考えを新しい山本理事長に聞いたところ、地域医療構想は本部で考えるものではなくて、地域で協議し、決めていくことが最も正しい方法であり、調整会議を進めていく中で、私も含め病院の管理者が地域にとって一番良い方法を決めてくれればそれに関して本部は協力するとのことであった。JCHO本部としても地域の現場での意見を大事にするように、そして、自分たちの今ある病院がどういう方針で進むのか、それが最も良いことなのかを考えて決めていいとの返事をいただいているので、本日のような会議を進めながら、自院はどう協力できるかをこれからも考えていきたい。

【能代市山本郡医師会長】

地域医療構想はなかなか難しいが、この会議自体は地域の主な病院の先生方が画面越しでも直接話し合っ、自院の長所短所を出して、それで足りないところを話し合っ協力し合っっていく意味では非常に重要な会議だと思っている。これからも、この会議を進めていただきたい。

【能代市・山本郡歯科医師会長】

今回、コロナの関係では歯科についても、感染予防に関して、一生懸命取り組んでいただき、大きな問題もない。引き続き医療機関の方々にはお世話になるが、よろしくお願ひしたい。

【県薬剤師会能代山本支部副支部長】

今回のコロナに関して、調剤薬局の方では、医師の指示を受け、自宅に薬の速やかな配送や服薬指導をしている。今後も医師会と薬剤師会とで速やかに患者のための投薬指導をしていきたい。

【県看護協会能代・山本地区理事】

看護師は、地域の医療を守るために、それぞれの医療機関で一生懸命頑張っており、コロナ禍であっても、これからも地域を守るために一生懸命協力して頑張っていきたい。しかし、コロナに関する相談が病院に対して非常に多い。行政で行っている相談窓口がなかなか繋がらないのでどうしたらいいかとの相談が夜間病院に寄せられることもあ

る。病院としては医療業務のほかに相談業務が増え、非常に過重となっているので、行政の方で相談窓口の回線をもっと広げるなど対応してほしい。

【能代市健康づくり課長】

今、コロナワクチンの4回目接種が本格化しており、各病院の御協力をいただき、感謝している。また、国からは5回目の接種について準備をする旨通知が届いているので、詳細が分かり次第、相談させていただきたい。

【藤里町町民課長】

コロナワクチンの集団接種は今週から始まった。予定数が埋まるか心配だったが、何とか埋まりそうな状況である。またオミクロン株対応のワクチンなど、これからまた接種が本格化してくると思う。

【三種町健康推進課長】

やはり5回目のワクチン接種について、詳しい情報は、まだ入ってきてないが、どういったタイミングでやるのか、接種会場の準備も含め、かなり気になっている。集団接種実施の際には、御協力いただきたい。

【八峰町健康福祉課長】

当町においても感染症の拡大が目に見えて数字に現れている状況が続いている。小さい町だが、特養で100人を超える施設を抱えるなどの状況もあるので、地域住民に今後とも感染症対策について適切な情報を発信するように心がけたい。

【地域医療構想アドバイザー（県医師会島田常任理事）】

コロナに関して、宿泊療養施設、薬局の当番、お盆前後の検査あるいはワクチン接種は、この地区での協力は進んでいると感じている。一方、地域医療構想調整会議に関しては、オンラインでの会議もできるので、これまで大変だったが、引き続き開催を続け、意見を言い合うことが非常に大事なことである。資料の整備についての御指摘は、次の会議に生かしていただきたい。

終了